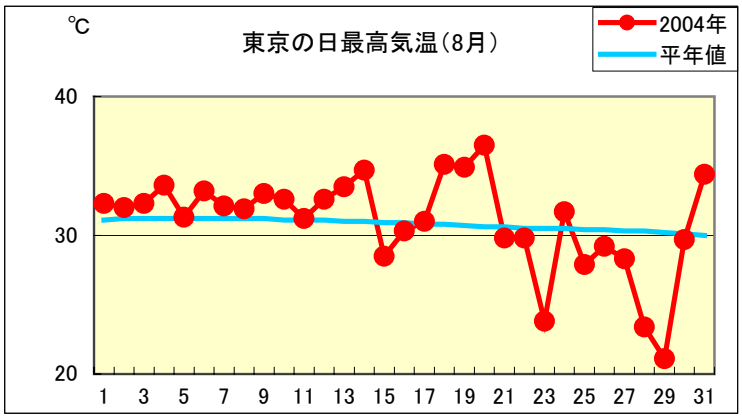
平成 16 年 8 月の解説（府県天気予報）

【8 月の天候状況】

8 月に日本へ接近した台風は 6 個と平年（3.4 個）に比べて多く、しかも 4 日に台風第 11 号が徳島県、20 日に第 15 号が青森県、30 日に第 16 号が鹿児島県にそれぞれ上陸して大荒れの天気となり、各地で大雨・強風・高潮などの災害が発生しました。

7 月からの全国的に気温の高い状況は、台風の影響を受けて旬平均気温が平年並となった西日本を除いて、上旬も広い範囲で継続しました。中旬になると北日本を中心に寒気の影響を受けるようになり、旬平均気温は北日本で平年より低くなりましたが、東日本と南西諸島では平年並で、西日本では平年より高くなりました。下旬は寒気の影響する範囲がさらに広がり、旬平均気温は北日本と東日本で平年より低くなりましたが、西日本で平年並、南西諸島で平年より高くなりました。

西日本の一部を除いて、月平均気温は平年並か平年より低くなった地方が多いですが、その原因は中旬以降北日本を中心に徐々に影響を強めた寒気にあります。東京での気温の経過を見ると、月の中頃までは毎日暑い夏でしたが、前線が南下して日中に 18℃台まで気温が低くなった 15 日を境に、北の寒気に伴う北東風と日本海を進む台風や低気圧に向かう南風の影響を交互に受けて日最高気温の変化が大きくなっています。



東京の日最高気温（2004 年 8 月）

東京（大手町）では 14 日を最後に、40 日間続いた日最高気温 30℃以上の連続真夏日（新記録）が途絶えた。その後は、日最高気温の振れ幅が大きくなり、25℃以上の夏日に達しない涼しい日も 3 日あった。

【8 月の検証結果】

17 時発表予報の「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報が例年並（注）の 78%、明後日予報が例年より 2 ポイント低い 73%でした。明日予報・明後日予報とも、沖縄地方で例年よりそれぞれ 6 ポイントと 4 ポイント高くなっていますが、西日本を中心に例年よりやや低い所が多くなりました。特に、相次いで西日本へ接近・上陸した台風に伴う降水の予想が不十分だった影響で、四国地方の明後日予報では適中率が例年より 12 ポイント低くなっています。

最高気温と最低気温の予報誤差（RMSE）は、ともに全国的にほぼ例年並の所が多く、全国平均も例年並の 1.7℃と 1.2℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

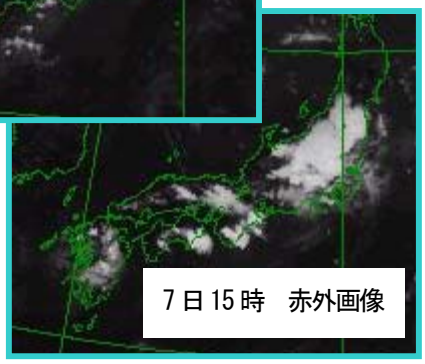
【8 月の天気予報から】――上空寒気と地上昇温による不安定（7 日の天気予報から）――

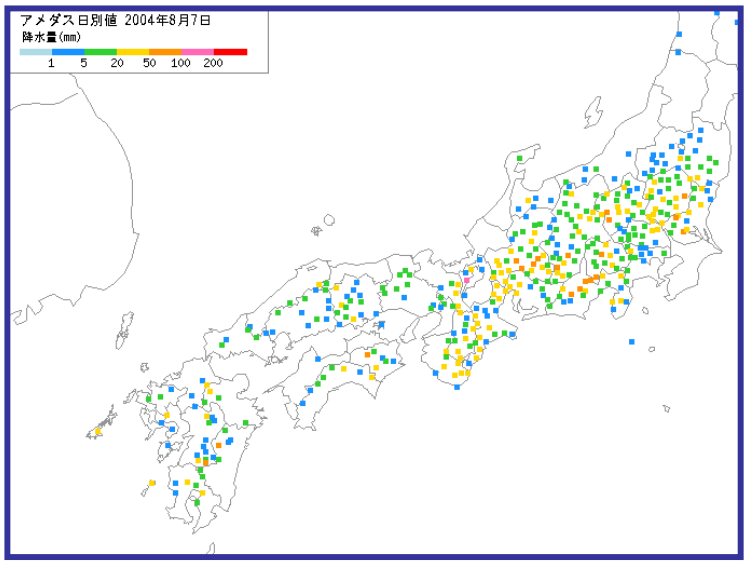
夏の風物詩の一つに夕立が挙げられます。7 日は、上空に寒気が流れ込んだことに加え、太平洋高気圧に覆われ全国的によく晴れて気温が高くなったために大気の状態が不安定になり、

午後は九州から東北南部にかけての広い範囲で雨や雷雨となりました。

雲画像を見ると、9 時はほとんどの地方で晴れていますが、15 時には多くの地方で雷雲が発生しています。この日の日中の気温は 30℃を越えた所がほとんどでした。アメダスの日雨量分布図でも、広い範囲で雨の降ったことが分かります。

7 日朝の東京地方の予報では、大気の状態が不安定になることを予想し、「晴れ時々曇り　昼過ぎから　多摩西部では一時雨か雷雨」としました。実際には、予想した以上に不安定の領域が広くなり、東京地方のアメダス 10 地点のうち 6 地点で 1 ㍉以上の雨を観測しました。





7 日の日雨量（アメダス）

【10 月の天気予報の利用にあたって】

10 月は夏から冬に向かう季節の中間点です。上旬から下旬にかけて気温の日較差が徐々に大きくなり、天気の傾向も大きく変わる月です。

上旬は日本付近に停滞する秋雨前線の影響で東日本を中心に曇や雨のぐずつく日が多いのですが、中旬になると移動性高気圧と低気圧が交互に通過するようになり、天気が数日の周期で変わるようになります。移動性高気圧に覆われた日は、スポーツや行楽に適した「秋晴れ」となります。下旬になると、関東地方の北部でも初霜（宇都宮の平年日は 10 月 28 日）が観測されるようになります。

季節外れの霜は農作物に大きな被害を及ぼすことがあります。暖かい日の多かった今年の春でも、4 月 25 日に関東甲信地方や静岡県などで野菜やお茶への降霜被害が発生しました。春の晩霜と同様、秋の早霜にも注意が必要です。この季節は、天気予報の中で最低気温の予報にも注目してください。